2016 年度理論言語講座概要

①
日本語文法と一般言語学

（月曜日 1 限・午後 6:00〜7:30）前期　＜言語学特殊講義＞

三宅　知宏（鶴見大学教授）

【講義概要】

本講義は，普遍的な一般言語研究を視野に入れながら，個別言語としての日本語について，特に「文法」（形態論，統語論，意味論，語用論との接点を含む）の分野を中心に，考えます。

次のような方を対象として想定しています。①日本語文法に関して，一般言語学（言語理論）の基礎としての知識を得たい方，②日本語文法に関して，日本語教育を行う上での知識を得たい方，③日本語文法に関して，専門的な研究を進める上での知識を得たい方，④日本語，特に文法の分野に関して，知的興味を持っている方。

さらに上の①〜④については，日本語が母語かどうかを問いません。日本語の母語話者であれば，無意識に知っていることを意識的に知るということを，非母語話者であれば，日本語という言語の特徴を知るということを，本講義は目的とします。

一例をあげます。「どちら様でしょうか？」のような「〜でしょうか」を伴う疑問文は，「どちら様ですか？」のような普通の疑問文よりも「ていねい」に感じられます。また疑問文なのに，上昇のイントネーションをとることができません。これはなぜでしょうか。

本講義では，まずこのような興味深い事実を可能な限り多く，提示します（④向け）。次に，このような事実がどのように一般化され，説明され得るのかについて，解説します（②③向け）。そして，それが，一般言語学の知見（言語理論）に照らしてどのような意味を持つのか，また他の言語と対照した場合にどのようなことが言えるのか等についても言及します（①向け）。

【テキスト・参考文献】

本講義において、特定のテキストは使用しません。必要に応じて、プリントを配布します。参考文献は、授業中に適宜、紹介します。

【この課目で前提とされる知識など】

本講義は、受講にあたっての特別な知識は必要としません。もちろん、専門的な知識を既に持つ方の受講も拒みません。

【プロフィール】

三宅　知宏（みやけ・ともひろ）
鶴見大学文学部教授(2016 年 3 月まで。2016 年 4 月より大阪大学准教授)
日本語学，言語学　1997 年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程退学、博士（文学）
『日本語研究のインターフェイス』（くろしお出版，2011），『日本語と他言語』（神奈川新聞社，2007），他

②
生成文法Ⅱ　移動の性質から言語理論を考える

（月曜日２限・午後 7:40 ～ 9:10）通年　＜生成文法＞
髙橋　将一（青山学院大学准教授）

【講義概要】
　移動現象は、生成文法研究の中で常に多くの注目を集め、またその研究は重要な成果を生み出しています。本講義では、移動によって形成されたと考えられる依存関係において観察される様々な現象を検討することで、このような研究によって明らかになった言語の性質や近年の言語理論の発展について考えていきます。具体的には、以下のような問題を考えていく予定です。まず、移動元の統語的特徴や依存関係の構築に関わる操作などについて議論し、統語構造の構築メカニズムについて考えていきます。さらに、多くの場合、移動が許されない島からの抜き出しや、移動した要素に束縛されない痕跡を含む構成素の移動（remnant movement）といった特殊な依存関係で観察される特徴に注目し、移動の制約の背後にある要因について検討していきます。また、移動は種類により異なった振る舞いを見せることが知られていますが、移動の種類とそれに伴う特徴的な性質を把握した上で、このような事実に対する理論的説明を概観したいと思っています。例えば、Condition Cの違反を引き起こす再構築現象に対する主語繰り上げ移動とwh句の移動の違いに対する非循環的併合を使用したTakahashi and Hulsey (2009)の分析を一例として取り上げたいと考えています。最後に、上記のような講義内容を予定しておりますが、可能な限り受講生の興味、関心を踏まえながら講義内容を考えていきたいと思っています。

【テキスト・参考文献】
テキストは使用しませんが、Takahashi S. and S. Hulsey. 2009. Wholesale late merger: Beyond the A/Ā distinction. *Linguistic Inquiry* 40:387-426 などを含め、関連する文献については、講義の中で紹介します。

【この課目で前提とされる知識など】
生成文法の入門書の内容程度の知識を前提とします。

【プロフィール】
髙橋　将一　(たかはし・しょういち)
青山学院大学文学部英米文学科准教授
統語論、意味論、統語論と意味論のインターフェイス
2006 年マサチューセッツ工科大学大学院博士課程言語学・哲学学科修了、Ph.D.
主要論文：The hidden side of clausal complements. *Natural Language & Linguistic Theory* 28:343-380、More than two quantifiers. *Natural Language Semantics* 14:57-101 など。

③
　日本語文法史
（月曜日２限・午後７：40～9：10）前期　＜史的言語学＞
川村　大（東京外国語大学教授）

【講義概要】
　国語の教師になる場合だけではなく、日本語学校で教壇に立つ場合でも、日本語文法の歴史に関するしっかりした知識がなければどこかで行き詰まることになる。「感謝しこそすれ、文句を言う立場ではない」の「すれ」とは何か、活用表では同じ形をなぜ「終止形」

と「連体形」に分けているのか、「もうしません」の「ん」と「いざ行かん」の「ん」はどう違うのか……。教師は、学習者が発するこうした質問に答えられなければならないはずである。

この講義では、日本語における文法事実の歴史的変遷を、いくつかの大きな流れに注目して概説する。事実の紹介もさることながら、「これら一つ一つの変化は全体としてどのような変化の方向を示していることになるのか」についてもできるだけ考えてみたい。

次のような話題を取り上げる予定である。

- 係り結びの成立と衰退
- 連体形終止の一般化（終止形と連体形の合一）
- 古代語助動詞の衰退（述定組織の変遷）
- 接続表現の変遷

【テキスト・参考文献】

教科書は使用せず、ハンドアウトを配布する。参考文献は随時指定する。

主要参考文献：高山善行ほか『ガイドブック日本語文法史』（ひつじ書房）、小田勝『実例詳解 古典文法総覧』（和泉書院）　ほか

【この課目で前提とされる知識など】

日本語学・言語学の入門程度の知識が必要である。古文の知識は高校で教わる程度で良い。事前に勉強したい人は、日本語史の概説書の「文法史」の章などを読むとよい。

【プロフィール】

川村　大（かわむら・ふとし）
東京外国語大学大学院教授
国語学（文法、文法論）。
1990 年東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。博士（文学）。
『ラル形述語文の研究』（くろしお出版、2012）、「動詞ラル形述語文と無意志自動詞述語文との連続・不連続について」（『国語と国文学』89 巻 11 号、2012）「ラレル形述語文における自発と可能――古代語からわかること――」（『日本語学』32 巻 12 号、2013）など。

④

認知言語学ＩＢ　文法と意味
（月曜日１限・午後 6：00～7：30）後期　＜認知言語学入門＞

西村　義樹（東京大学教授）

【講義概要】

R. W. Langacker の認知文法の観点から文法と意味の関係をめぐる諸問題について考察する。（必要があれば、最初の１、２回で認知言語学を初めて学ぶ方々のための導入を行う。）認知文法のどこが「認知的」なのか、文法と関わる意味とはどのようなものか、文法カテゴリー（名詞、動詞、それぞれの下位類など）や文法関係（特に主語）に意味的な基盤はあるのか、語彙と文法はどのような関係にあるのか、比喩（特に隠喩と換喩）と文法の関係とは、などが主題になる予定である。面接および初回の授業で受講者のご意見を伺った上で、扱う問題を絞り込んで詳しく扱うことも考えている。

【テキスト・参考文献】

講義で使う資料のコピーはこちらで準備する。参考文献は講義の中で適宜紹介する。

【プロフィール】
西村　義樹（にしむら・よしき）
東京大学文学部　言語学研究室　教授
認知言語学、意味論、日英語対照研究
1989 年東京大学大学院人文科学研究科博士課程（英語英米文学専攻）中退。
『構文と事象構造』（共著、研究社、1998）、『認知言語学Ⅰ：事象構造』（編著、東京大学出版会、2002）『言語学の教室』（共著、中公新書、2013）『明解言語学辞典』（共編著、三省堂、2015）など。

⑤
　言語哲学
（月曜日２限・午後 7：40〜9：10）後期　＜言語学特殊講義＞
酒井　智宏（早稲田大学准教授）

【講義概要】
　あなたと固い絆で結ばれていたはずのタマが行方不明になり、タマのクローンをプレゼントされたとします。そのクローンは何から何までタマと同じです。あなたはタマクローンをタマと同じように愛することができるでしょうか。できないでしょう。「これは偽物だ。タマじゃない。」人間の心は「タマと何から何まで同じもの」を「タマと同じもの」とみなすことを拒否します。
　あなたと固い絆で結ばれていたはずのタマが行方不明になり、15 年後に変わり果てた姿で戻ってきたとします。15 年前のタマの面影はありません。それでもあなたは 15 年前と変わらずタマを愛するでしょう。「これはまちがいなくタマだ。」人間の心は「かつてのタマと何から何まで違うもの」を「かつてのタマと同じもの」とみなします。
　「同じなのに違う。」「違うのに同じ。」このような不合理としか思えない心のはたらきが固有名詞の使用にかかわっています。「同じものは同じ。」「違うものは違う。」合理性だけを追究するならこれでじゅうぶんでしょう。タマがいなくなったら、タマクローンがタマの代理を務める。そういう社会のほうが合理的です。いなくなったタマのことをいつまでも考えて何のメリットがあるのでしょうか。どうやら人間の心は合理性だけでは説明のつかないものを含んでいて、それが言語を駆動しているようです。その正体はいったい何で、何のために生じたのでしょうか。
　この講義では、言語学の教科書が黙って通り過ぎてしまう問題を、あえて立ち止まって考えてみます。昨年度とは異なる題材を取りあげます。

【テキスト・参考文献】
　教科書は使用せず、ハンドアウトを配布する。参考文献は随時指定する。

【この課目で前提とされる知識など】
　言語学や哲学に関する予備知識は必要ありません。

【プロフィール】
酒井 智宏（さかい・ともひろ）
早稲田大学文学学術院准教授
言語哲学、意味論、語用論、フランス語学
2003 年東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、博士（学術）
2004 年パリ第 8 大学大学院言語学専攻博士課程修了、Docteur en Sciences du Langage
主要著作: 『トートロジーの意味を構築する―「意味」のない日常言語の意味論―』（単著くろしお出版、2012）、『フランス語学小事典』（共著、駿河台出版社、2011）

⑥
認知言語学Ⅱ
（火曜日１限・午後 6.00～7.30 ）通年　＜認知言語学＞
池上　嘉彦（東京大学名誉教授）

【講義概要】
母語として獲得することを通して身についた言語感覚は、それがごく自然に身体化されたという、まさにそのことの故に、きわめてしっかりと身に染み付いてしまっている。そのため、ある言語を母語とする話者は、同じ事態について話しているはずなのに、別の言語の話者が自らの言語の場合とはひどく異なる言い回しをするのに接すると、時にはかなりな違和感を経験する。（例えば、道に迷って人に尋ねる時の日本語話者の「ここはどこですか」と英語話者の「私ハドコニイマスカ」（'Where am I?'）。）異なる言語の話者の間では、同じ事態であっても、それをどのように認知的に捉え、言語化するかという点で、慣習的な差異がありうるということである。

日本語教育は、このような差異との向かい合いがしばしば顕在化する場である。かつての言語学では「言語の恣意性」という基本原則のもと、このような事情は説明を要することとされず、日本語教育でも「日本語ではそう言うことになっているのだから、そう言うのだ」と言うだけですまされてしまうことも可能であった。

認知言語学では、＜ことば＞はことばを使う＜人＞のこころの働きによって十分＜動機づけられて＞いるという認識が共有されることにより、上記のような事情についての問題提起もまったく正当なもの、積極的に取り組んで説明されるべきものという位置づけが与えられる。本講では、認知言語学を念頭において編集されている近藤・姫野編著（2012）と池上・守屋編著（2010）に注目し、前者で「日本語文法の論点」として取りあげられている具体的な問題点を、後者および個々の論点についての研究論文にも言及しつつ、検討してみたい。

【テキスト】
近藤安月子・姫野伴子編著『日本語文法の論点４３―「日本語らしさ」のナゾが氷解する』研究社、２０１１／池上嘉彦・守屋三千代編著『自然な日本語を教えるために―認知言語学をふまえて』ひつじ書房、2009［任意］.関連する研究論文（英語のものも含む）等はその都度指示。必要に応じて、コピーを配布する予定.

【この課目で前提とされる知識など】
認知言語学の知識はこれを機会に勉強するということでも十分。英語との対比にはしばしば言及するであろうから、基礎レベルの知識は望ましい。

池上　嘉彦（いけがみ・よしひこ）
東京大学名誉教授、昭和女子大学名誉教授、日本認知言語学会名誉会長
東京大学で英語英文学(B.A., M.A.)、Yale 大学大学院で言語学(M.Phil.,Ph.D.)を専攻。ｲﾝﾃﾞｨｱﾅ大学、ﾐｭﾝﾍﾝ大学、ﾍﾞﾙﾘﾝ自由大学、ﾁｭｰﾋﾞﾝｹﾞﾝ大学、北京日本学研究センター、ﾏｻﾘｸ大学(ﾁｪｺ)などで客員教授。ﾌﾝﾎﾞﾙﾄ財団、ﾌﾞﾘﾃｨｯｼｭ・ｶｳﾝｼﾙ、ﾌﾙﾌﾞﾗｲﾄ財団、ﾛﾝｸﾞﾏﾝ社の研究員として独英米の大学に滞在。著書：『英詩の文法』、『意味論』、『「する」と「なる」の言語学』、『ことばの詩学』、『詩学と文化記号論』、『記号論への招待』、『＜英文法＞を考える』、『日本語と日本語論』、『自然と文化の記号論』など。

⑦
日本語文法の体内感覚
（火曜日２限・午後 7.40～9.10 ）通年　＜日本語文法理論＞
尾上　圭介（東京大学名誉教授）

【講義概要】
一つの文法形式が場合によって大きく（あるいは微妙に）異なる複数の意味を表すことが多い。「９時になったか？」の「か」と「なんだ、まだ８時か」の「か」とは意味が違うが、微妙につながっているという直感が働く。「何かが見えている」の「か」はこれらと大きく違うが、しかしあるつながりがありそうだ。
「バスもタクシーも来ない」の「も」と、「心配で夜も寝られない」の「も」と、「５０人も集まった」の「も」と、「誰も知らない」の「も」と、「雨が降ってもやります」の「も」とは、表している意味が大きく異なるが、なにかあるつながりを感じる。
一つの文法形式（上例では助詞）の多義の相互の関係と、その文法形式固有の性格を問うことは文法論の最大の魅力である。
一口に受身文といっても、その許容度には様々の段階がある。
①「雨に降られた」は十分に言えるが、②「雷に落ちられた」は言いにくい。③「大雨で、（楽しみにしていた）桜に散られた」はある程度言えそうな気もするが、④「桜に咲かれた」は絶対に言えない。⑤「机が壊された」は翻訳口調の受身としてある程度許されるだろうが、⑥「机が叩かれた」は日本語でも中国語でもまず言わない。このような許容度の微妙な差は、どうして生ずるのであろうか。これらの問題は、特定の言語理論を適用すれば説明が付くというようなものではない。
「やる気（ａ）あるけど、体（ｂ）ついて来ん」の（ａ）と（ｂ）にはそれぞれハとガのいずれが入りうるだろうか。ありうる組み合わせの中でもっとも許容度の高いのはどれか。それは何故か。「ハ」と「ガ」の使い分けが外国人にとって難しいのは何故だろうか。
日本語を使う際の微妙な体内感覚を出発点として、文法概念の内実を問い、文法理論を紡ぎ出していく面白さを伝えたい。

【テキスト・参考文献】
講義理解のために必要となる文法事実や先行研究は、必要に応じて資料を配りつつ講義の中で説明する。

【この課目で前提とされる知識など】
特に必要ない。好奇心さえあれば。

【プロフィール】
尾上　圭介（おのえ・けいすけ）
東京大学名誉教授
大阪市の生まれ。博士（文学）。専攻は、文法論・意味論・文法史、および「大阪のことばと文化」。日本笑い学会理事。東京大学大学院人文科学研究科国語国文学専門課程修士課程修了。神戸大学助教授、東京大学教授を経て。
著書に、『文法と意味Ⅰ』（くろしお出版・２００１）、『大阪ことば学』（創元社・１９９９、岩波現代文庫・２０１０）、『朝倉日本語講座第６巻・文法Ⅱ』（編著、朝倉書店・２００４）、日本語文法学会編『日本語文法事典』（共編、大修館書店・２０１４）など。

⑨

音声学

（水曜日1限・午後6:00～7:30）　前期　＜音声学＞

上野　善道（東京大学名誉教授）

【講義概要】

音声を正しく聞き取って書き取り、それを発音できるようでなければ、未知の言語・方言の研究は一歩も進まないと言っても過言ではありません。それだけではなく、英語や日本語などのよく知られている言語でも、音声学を身につけていないと事実がきちんと観察できません。また、歴史・比較研究にも音声学の知識が不可欠です。日本語で現在進行中の変化も，音声学的素養がないと気が付かないものです。

この講義の具体的な目標は，「国際音声字母」が使いこなせるようになることです。そのために「実践音声学」の訓練を行なうので、聞き取りテストと発音練習はほぼ毎時間当てられるものと思ってください。本を読んで頭で理解するだけでは音声学は身に付かないからです。

しかし，難しく考える必要はありません。人間は，何語でも話せるようになる能力をもって生まれてきます。音声に関しても同じで，誰でも，世界中の言語の音声をマスターする力があるのです。これには器用・不器用はあっても，本質的な能力差はありません。柔軟な頭と努力によって可能となります。母語の枠に固執しない柔軟な対応と，日々の練習があるのみです。コツは，毎日楽しく実践することです。

なお，本年度の「音声学」は，これまで通年で行なってきた私の担当は前期のみ（かつ，今回が本研究所での最後の講義）で、後期の「音声学」（斎藤純男氏担当）とは独立の単位となります。

【テキスト】

風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健（2016）『言語学』第 2 版第 9 刷（東京大学出版会）。各自用意してください（最新の第 2 版第 9 刷が望ましいが、第 2 版第 5 刷以降であれば対応可能）。

【この課目で前提とされる知識など】

予備知識は必要ありません。日々の努力さえあれば十分です。予習よりも復習が重要です。ただし，恥をかきたくないので人前で発音をするのは嫌だ，という人には向いていません。

【プロフィール】

上野　善道（うわの・ぜんどう）

東京大学名誉教授／日本語学会前会長，日本音声学会元会長，日本言語学会元会長。

専門は音声学・音韻論・方言学。特に日本語諸方言のアクセント研究。

「フンイキ＞フインキの変化から音位転換について考える」『生活語の世界』: 8-19（2014），″Three types of accent kernels in Japanese″ Lingua 122: 1415-1440，「琉球喜界島方言のアクセント――中南部諸方言の名詞――」『言語研究』142: 45-75，「N型アクセントとは何か」『音声研究』16(1): 44-62（以上 2012），『日本語研究の 12 章』（監修，明治書院，2010），『朝倉日本語講座３　音声・音韻』（編著，朝倉書店，2003）等。

語形成とレキシコン
（水1限・午後6:00〜7:30）　前期　＜形態論・語形成論＞

杉岡　洋子（慶應義塾大学教授）

【講義概要】

言語の根幹は特定の形と意味との結びつきにあるといえますが、その条件を満たす最小単位は広義の「語」です。しかし２つ以上の要素が語を作る現象（語形成）は言語による違いが大きく、例えば動詞を並べて複合動詞を作るプロセスは日本語では生産的ですが（「書き直す」、「書き上げる」、「書きちらす」、「書き漏らす」など）、英語で同様の意味をあらわすには、複合動詞ではなく接辞や不変化詞を付けたり、別の動詞やより複雑な表現を用います（re-write, write up, scribble, fail to write など）。こういった言語間の形態論的な違いは、普遍的な文法理論の構築にとって重要なテーマです。

この講義では、英語と日本語の語形成のうち、動詞や名詞の派生や複合といった、新語を造り出す生産力の高い現象を取り上げ、その形式と意味の規則性がどのように説明できるかを考えます。特に、語の意味についての私達の知識が入っているレキシコン（＝頭の中の辞書）についての知見を使った分析に焦点をあて、語彙概念意味論、生成語彙理論などによるアプローチを紹介します。

講義に加えて、いくつかのトピックについて課題を議論する機会も設ける予定なので、ぜひ積極的に参加して、自分でデータを集めて分析する楽しみも味わってください。

【テキスト・参考文献】

影山太郎『形態論と意味』（日英語対照による英語学演習シリーズ）くろしお出版、1999年。授業ではレジュメを使用し、関連する文献等は授業時に指示します。

【この課目で前提とされる知識など】

専門的な予備知識は特に必要としません。日本語と英語以外の言語を専攻する方や幅広い専門や背景の方を含めて、語の成り立ちやレキシコンに興味のある受講生を歓迎します。

【プロフィール】

杉岡　洋子（すぎおか・ようこ）
慶応義塾大学　経済学部教授（英語・言語学）／言語文化研究所副所長
形態論（語形成、語彙意味論、レキシコンと統語・意味の関わり、語形成の心的メカニズム）
1984 年シカゴ大学大学院言語学科博士課程修了、Ph.D.　*Interaction of Derivational Morphology and Syntax in Japanese and English* (Garland Publishing, 1986).『語の仕組みと語形成』（共著、研究社、2002）、『名詞の意味と構文』（分担執筆、大修館、2011）など。

生成文法Ⅰ（入門）

（水曜２限　午後 7: 40 ～ 9: 10）　通年　＜生成文法入門＞

今西　典子（東京大学教授）

【講義概要】

「生成文法」では，　たとえば日本語を母語とする人の脳内には日本語の知識（日本語文法）が蓄えられており、無意識にそれを使ってさまざまな言語活動を行っていると考えます。人間の言語についてこのように考えると、「人間の言語知識はどのような性質を持ったものであるのか、　また、　他の知識とどのように違っているのか」、「言語知識は生後脳内にどのように生じて蓄えられていくのか」,「言語知識は理解や発話の過程でどのように使用されるのか」、「言語知識は脳のどの部分にどのように蓄えられていているのか」、「人間という種に固有な言語機能はどのようにして人間に生じたのか」というさまざまな問いが生じます。生成文法は、これらの問いに対して統合的な答えを与えることをめざしており、普遍文法（UG）と言語経験の相互作用の帰結として、個別言語の文法にみられる共通性と多様性を説明しようと試みています。

本コースでは、まず、上述したような生成文法理論の基本的な考え方について理解を深めたうえで、主に英語と日本語について、語構造と節構造に焦点を当て、移動現象、照応や削除現象、数量詞や否定辞の作用域にかかわる現象などの具体的な言語事象をとりあげ、言語表示における基本要素や関係概念、規則の形式と適用方式、派生や表示に課される制約などの基本概念を学び、生成文法理論に基づく記述や説明を概観します。次に、UG と言語間変異・言語獲得という問題に焦点をあて，　UG への原理とパラメータのアプローチについて学び、UG の諸原理とパラメータがどのように働き合って、人間の言語の普遍性と多様性が記述・説明されうるかを概観します。

【テキスト】

授業は、講義・セミナー形式で行い、参考資料は適宜配布し、随時参考文献等を紹介します。

【この課目で前提とされる知識など】

受講には、生成文法理論に関する予備知識は必要としませんが、本講座の言語学入門コースに相当する知識があれば、より理解が深められます。

今西　典子（いまにし・のりこ）
東京大学大学院人文社会系研究科教授
理論言語学・英語学（生成文法　（統語論・意味論),言語獲得理論）
1977年東京大学大学院人文科学研究科英語英米文学専門課程（博士課程）単位収得退学
『照応と削除』（共著，大修館書店,1990），『言語研究入門:生成文法理論を学ぶ人のために』（共著,研究社、2002）『言語の獲得と喪失』（共著,岩波書店,2005）『はじめて学ぶ言語学』（共著、ミネルヴァ書房、2009）など。

⑪
言語心理学Ａ　第一言語獲得
（木曜日１限・午後 6.00～7.30 ）通年　＜言語心理学＞
佐野哲也（明治学院大学教授）

【講義概要】
　ヒトが第一言語を容易に獲得できるのはなぜかという疑問について、それは生まれつきの能力によって助けられているからだという答えが考えられます。このような問いを中心に、この講義では第一言語獲得についての諸問題をあつかいます。
　最初に、生成文法理論を基礎として、幼児の言語能力を生まれつきのものとそうでないものに分けて考えることを中心に入門的解説をします。 そのあとで、幼児による英語・日本語の獲得についての研究の代表的なものを紹介し、実際の研究例のなかで生まれつきの能力がどのようなかたちで研究されているかをみていきます。これらの講義をとおして、幼児言語の分析の基本的な考え方を解説し、ヒトが第一言語を容易に獲得できるのはなぜかという疑問について、幼児言語をとおしてどのような研究ができるかを考えていきます。
　具体的な項目については、面接の際に「２０１４年度言語心理学Ａ」を既習の受講者数を確認して、既習者と未習者のバランスを考慮しながら、「２０１４年度言語心理学Ａ」との重複を最小限におさえるようにする予定です。同時に、今回の内容は「２０１４年度言語心理学Ａ」を前提にしたものではなく、今回が初めての受講者と既習者の両方を対象にした内容になります。

【テキスト・参考文献】
教科書は特に使用せず、スライドをもちいて講義します。

【この課目で前提とされる知識など】
特にありません。専門的知識を前提とせず、基本からわかりやすく解説します。

【プロフィール】
佐野哲也　（さの・てつや）
明治学院大学英文学科教授
University of California, Los Angeles, Ph.D. in Linguistics
主要著作：“Remarks on theoretical accounts of Japanese children’s passive acquisition,” in *Generative Linguistics and Acquisition: Studies in Honor of Nina M. Hyams,* John Benjamins, 2013. "On the Origin of Children’s Errors: the Case of Japanese Negation and Direct Passive," in *Handbook of East Asian Psycholinguistics, Volume 2, Japanese*, Cambridge University Press, 2006.

⑫
言語心理学Ｂ　文理解研究入門

（木曜日１限・午後 6.00～7.30 ）後期　＜言語心理学＞

小野　創（津田塾大学准教授）

【講義概要】

文理解研究とは、ヒトがリアルタイムに文を理解する際に頭の中でどのような処理が行われているのか解明することを目的とした分野です。「リアルタイムに」ということから分かるように、様々な実験的手法を用いて（また実験機材を用いて）仮説を検証していくことを繰り返していきます。言語学の他の講義でおなじみの音韻論や形態論、統語論や意味・語用論などの理論的な研究を土台にして、私たちに備わっている言語の仕組みが短期記憶といった言語以外の認知システムとどのような関係を結んでいるのかも調べます。

具体的には、統語的な情報と意味的な情報がどのように影響しあいながら文構造の構築が行われているのかという問題について、いくつかの論文を解説しながら紹介します。また関係節構造の処理については、構造・干渉効果・予測方略・談話など、多くの観点からのアプローチがなされており、そのいくつかを取り上げ、異なる言語での処理メカニズムの差異について考えます。また、Wh 句の処理についても概観します。それらの作業を通して、実験手法についても紹介していく予定です。

【テキスト・参考文献】

テキストは使用せず、適宜参考文献を指示します。

【この課目で前提とされる知識など】

言語学入門程度の知識を前提とします。

【プロフィール】

小野　創（おの・はじめ）

津田塾大学学芸学部　准教授

米国メリーランド大学大学院博士課程修了（Ph.D. in Linguistics, 2006）。広島大学特別研究員、近畿大学准教授などを歴任。専門は成人母語話者の文処理と理論言語学（統語論）。最近の論文は、「文解析と記憶システム：文法的依存関係構築における干渉効果の検討」共著（『言語の設計・発達・進化：生物言語学探究』藤田耕司他（編）開拓社、2014）や Integration costs in the processing of Japanese wh-interrogative sentences. *Studies in Language Sciences*, 13 (2014) 共著、「カクチケル語 VOS 語順の産出メカニズム―有生性が語順の選択に与える効果を通して」『認知科学』22 (2015) 共著、など。

⑬

言語類型論

（木曜日１限・午後 6:00～7:30）後期　＜言語学特殊講義＞

長屋尚典（東京外国語大学総合国際学研究院講師）

【講義概要】

世界には 6000 を超える言語が存在しますが、その構造は言語ごとに大きく異なります。たとえば、「長谷川さんが(S)野田さんを(O)殴った(V)」という内容を伝えるために、日本語のように SOV 語順をとる言語もあれば、英語のように SVO 語順をとる言語もあります。さらに VSO、VOS、OSV、OVS といった語順も存在します。ばらばらです。しかし、完全に不規則というわけでもありません。実は SOV 言語と SVO 言語だけで世界の言語の 80%以上を占めており、人間の言語に「S が O に先行する」「V と O が隣接する」という傾向があること

が分かります。この講義では、このような、世界の言語を幅広く観察することによって初めて観察できる言語の特徴に注目し、言語類型論と呼ばれる学問分野を紹介します。その前提として世界の語族や人類の歴史も俯瞰します。日本語と英語を比べているだけは分からない言葉の世界をみなさんと一緒にのぞいてみたいと思います。

1. 言語類型、語族、言語地域
2. 人類の移動と世界の語族（i）：アフリカからアメリカまで
3. 人類の移動と世界の語族（ii）：馬、農耕、アウトリガーカヌー
4. 語順のタイポロジー：日本語はどこにでもあるふつうの言語
5. 形態構造のタイポロジー：融合、統合、名詞抱合
6. 文法関係のタイポロジー：主語なんていらない
7. ヴォイスのタイポロジー：受身だけがヴォイスじゃない
8. テンス・アスペクトのタイポロジー：未来のない言語
9. 移動のタイポロジー：「走る」言語と「出る」言語
10. 空間指示のタイポロジー：「右」も「左」もない言語

【テキスト】
教科書は使用せず、ハンドアウトを配布します。

【この課目で前提とされる知識など】
入門・概論レベルの言語学の知識を前提とします。日本語や英語以外の言語の例をたくさん見ることになるので、それと根気よく向き合う気力が必要です。

【プロフィール】
長屋 尚典（ながや・なおのり）
東京外国語大学総合国際学研究院講師
PhD in Linguistics (Rice University, 2011)
オーストロネシア諸語、フィールド言語学、言語類型論
主要著作・論文：*Japanese/Korean Linguistics*, Volume 22 (2015, CSLI Publications; Mikio Giriko, Akiko Takemura, Timothy J. Vance との共編著)，「ラマホロット語の自他交替」(『有対動詞の通言語的研究』くろしお出版，2015)，“Ditransitives and benefactives in Lamaholot”（*Argument Realisations and Related Constructions in Austronesian Languages*, 2014）など。

⑭
音声学
（木曜日2限・午後7:40～9:10）　後期　＜音声学＞
斎藤　純男（東京学芸大学教授）

【講義概要】
世界には何千もの言語が話されています。しかし、人間が音声を発するために使用する器官は同じで、言語に使用できる音の範囲は決まっています。この講義では、人間が使用する言語音の全体像をとらえると同時に、個々の音について特にその産出の仕組みに重点をおいて学びます。音声学を理論的に理解するだけでなく、さまざまな音を実際に発音できるようになることを目指します。アクセントやイントネーションについても学習します。

【参考図書、参考ウェブサイト】
講義の際に指示します。

【この課目で前提とされる知識など】
　調音音声学の初歩的な知識があることが望ましいですが、基礎的な内容を復習しながら進めますので、初めての人でも予習・復習にきちんと時間を取れる人であれば問題ありません。

【プロフィール】
斎藤　純男（さいとう・よしお）
東京外国語大学大学院修士課程修了、専門は音声学・アルタイ言語学
著書：『日本語音声学入門』（三省堂、1997）、『コンピュータ音声学』（分担執筆、おうふう、2001）、『朝倉日本語講座３　音声・音韻』（分担執筆、朝倉書店、2003）、『新版日本語教育事典』（分担執筆、大修館書店、2005）、『言語学入門』（三省堂、2010）、『音声学基本事典』（共編著、勉誠出版、2011）、『明解言語学辞典』（共編著、三省堂、2015）、他

⑮
認知言語学ＩＡ　認知・機能言語学と談話
（金曜日　１限・午後 6:00 ～7:30 ）前期　＜認知言語学入門＞
大堀　壽夫（東京大学教授）

【講義概要】
　この講義では、認知・機能言語学--ことばを人間の概念化あるいは世界の「捉え方」との関わりで考えようとする取り組み--の基本概念を導入しつつ、そうした概念が談話の分析にとってどのような有効性をもつかを考えていきます。主に次のトピックを取り上げる予定です。
・図と地：句や文レベルの関係に加えて、談話の「めりはり」としての前景化について、ジャンルの違いも視野に入れながら考えます。

・フレーム：認知言語学では語や構文の意味を考える上で不可欠な概念です。その上で、談話におけるフレームの選択についても事例を見ていきたいと思います。

・メタファー他：系列化されたアナロジーとして概念メタファーを考え、談話の中でメタファーがどのように参照されるかという観点も含めて分析します。

・文法化・構文化：語句の意味が歴史の中で変化し、機能が拡張することがよく見られます。特に談話の構成に関わる語句の歴史的変化を見ていきます。

・従属節の機能：従属節が前置・後置（さらには主節抜きで独立して使用）される条件はどのようなものでしょうか。どこまでが談話上の条件で、他にはどのような条件があるのでしょうか。

【テキスト】

なし。必要に応じてプリント使用。

【参考文献】
　認知言語学の考え方を対話形式で説いた本として、西村義樹・野矢茂樹『言語学の教室--

哲学者と学ぶ認知言語学』（2013、中公新書）、中級以上の概説書として、大堀壽夫『認知言語学』（2002、東京大学出版）、松本曜（編）『認知意味論』（2003、研究社）、J.R. テイラー『認知言語学のための14章』（改訂版2008、紀伊国屋出版）があります。授業の最初に文献表を配布します。

【この課目で前提とされる知識など】
　認知言語学に接したことがあれば授業はフォローしやすいと思いますが、特定の授業を既にとっていないと受講できないということはありません。ことばに関心のある方ならどなたでも歓迎です。

【プロフィール】
　大堀　壽夫（おおほり・としお）
　東京大学大学院　総合文化研究科・教養学部教授
Ph.D.（UC Berkeley, 1992）。専攻は意味論、機能的類型論、談話分析、英語、日本語。特に接続構造の類型と文法化に関心をもっています。日本語による著書・編著：『認知言語学』（2002）、『認知コミュニケーション論』（編、2004）。共訳書：M. トマセロ『心とことばの起源を探る--文化と認知』（2006）、L. ウェイリー『言語類型論入門』（2006）、C. フリス『心をつくる--脳が生み出す心の世界』（2009）、M. トマセロ『機能・認知言語学--言語構造への 10 のアプローチ』（2011）。
http://phiz.c.u-tokyo.ac.jp/~tohori

⑯
文法原論

（金曜日　１限・午後 7:40 ～9:10 ）通年　＜言語学特殊研究＞
梶田　優（上智大学名誉教授）

【講義概要】
　最近数年間の理論言語学研究の実質的な部分を整理、吸収しつつ、動的文法理論の構築を進める。経験的基盤の一部として、個別言語研究、言語類型論、通時言語学、発達言語心理学、神経言語学などの成果を援用する。本年度も引き続き以下の諸点に比較的多くの時間をあてる予定。（１）言語類型論からの豊富な資料を真に活用するためには、静態的・出力説的な一般文法理論に代えて、動態的・過程説的な一般文法理論が必要になることを示す。（２）即座の行動を規定するオンラインの情報処理と、長期記憶の形成につながるオフラインの情報処理が、文法の構造にそれぞれどのように反映しているか、動的な視点から考察する。認知心理学、比較動物学からの示唆も参考にする。（３）述語構造、論理構造、情報構造、発話行為の四者が統語形式への写像においてどのように影響し合い、どのような言語間のヴァリエイションをもたらすか、その動態の解明を進める。（４）「部分から全体へ」と「全体から部分へ」、「末端から中央へ」と「中央から末端へ」という二系列の、それぞれ両方向性の情報の流れを、矛盾なく、しかも生成能力の過不足なく統合するには、どのような言語モデルが必要か。そして静態的・出力説的な一般文法理論の枠内でそのよ

うなモデルを想定することは可能か。

【テキスト・参考文献】

参考文献については講義中に紹介する。

【この課目で前提とされる知識など】

授業は講義形式。「生成文法入門」程度の予備知識が望ましいが、トピックごとに基礎を簡単に

復習してから話を進めるので、入門未修者も（面接ガイダンスのうえ）受講可。

【プロフィール】

梶田　優（かじた・まさる）

上智大学名誉教授

英語学、言語学

1967 年プリンストン大学 Ph. D.(言語学)。東京教育大学、東京学芸大学、上智大学で英語学、言語学を担当。『文法論Ⅱ』(共著, 大修館, 1974)、「生成文法の思考法(1)－(48)」（『英語青年』, 研究社, 1977-1981）など。

⑰

文の曖昧性の素因

（金曜日　2 限・午後 7:40～9:10 ）通年　＜意味論＞

西山　佑司（慶應義塾大学名誉教授・明海大学名誉教授）

【講義概要】

文の意味はしばしば曖昧である。しかし、日常、その曖昧性に気付かれることはあまりない。たとえば、(1)は(2)で言い換えることができる意味として通常、理解されるであろう。

(1) ブラジルの首都はどこですか。

(2) ブラジルの首都は、どの都市ですか。

しかし(1)には、(3) で言い換えることができる意味もある。

(3) ブラジルの首都は、どこにありますか。

これは、ブラジルの首都（ブラジリア）の位置を聞いているのである。このように、(1)は、(2)と(3)という互いに異なる構文の意味を表すことができ、曖昧なのである。

本講義では、文にこのような曖昧性をもたらす要因はそもそも何かという問題を多くの具体例を用いて体系的に論じる。とくに、文の曖昧性と語や句の曖昧性との関係は何か、文の曖昧性と解釈の複数性をいかに区別すべきか、という問題を検討し、その検討を通して、(i) 意味論と統語論との関係、(ii) 意味論と語用論との区別、(iii)＜名詞句が持つ意味＞と＜名詞句が文中で果たす意味機能＞の区別、(iv)自由変項と束縛変項の区別、(v)文の意味を構築する目に見えない糸の存在、などを正しく理解していただく。さらに、意味を基盤に据える認知言語学的なアプローチが有する問題点にも触れ、あるべき意味理論の姿を探究する。

【テキスト】 特定のテキストは使わない。プリントを配布する。

【主要参考文献】
西山佑司『日本語名詞句の意味論と語用論』(ひつじ書房、2003 年)、今井邦彦・西山佑司共著『ことばの意味とはなんだろう ― 意味論と語用論の役割 ―』(岩波書店、2012 年)

【この課目で前提とされる知識など】
意味論や語用論の予備知識は必要としない。言葉の意味や解釈に関心をもち、知的創造の喜びを体験したいと思う受講生を歓迎する。言語データを丁寧に見ると同時に論理的に考える態度が要求される。

【プロフィール】
西山　佑司（にしやま・ゆうじ）
慶應義塾大学名誉教授・明海大学名誉教授
意味理論、語用理論、コミュニケーション理論、言語哲学。1974 年マサチューセッツ工科大学(MIT)大学院博士課程哲学科修了、Ph.D.『意味論』(共著、大修館書店、1983 年)、『日本語名詞句の意味論と語用論』(ひつじ書房、2003 年)、『談話と文脈』(共著、岩波書店、2004 年)『ことばの意味とはなんだろう』　(共著、岩波書店、2012 年)、『名詞句の世界』(編著、ひつじ書房、2013 年)。